

「博士号」とかけて「足の裏のご飯つぶ」と解く 肩書だけで飯の食える時代は終焉

博士号を持っていると聞くと、世間の人々が尊敬のまなざしで見ると。これは大学への進学率が10%、20%と低かった時代のことであり、当然のことながら大学院まで進む学生は少数、さらに博士課程までともなるとさらに少数という時代の話である。

日本経済新聞

2019. 12. 7

**春秋**

「足の裏のご飯つぶ」とかけてまして「博士号」と解きます。その心は「取っても食えません」。こんななぞかけがある大学の関係者から聞いたのは、もう十数年前のことだ。思わず「うまい」と手をたたいてしまったが、それ以上、どう反応しようか迷った覚えがある。

▼大学院で博士号を得ても安定した職につけないポストク問題は、より深刻になっているらしい。平均年齢は2009年度に33・8歳だったが、15年度には36・3歳。不安定な期間は長引き、志願者も減りつつある。大学にポストの空きは少なく、企業も採用に二の足を踏む。せっかくの能力を、社会は生かされていない。

▼若手研究者に平均で年700万円を最長10年間、助成する――。政府は5日に決めた経済対策に、こんな支援策を盛り込んだ。500億円の基金を設け、主に科学技術の分野で700人を選ぶという。未来を担う優秀な頭脳に、じっくり挑戦できる環境を整えようとの狙いだ。海外に比べ遅れた人材育成の挽回策でもある。

▼人工知能（AI）や高速通信の分野で、国境を越え逸材の争奪戦は激しさを増しているらしい。競り負けないためには「取って食える」、さらには「取って輝く」博士号に脱皮させ、活躍の場も広げる策は待ったなしであろう。次世代の技術の覇権を駆け各国がしのぎを削る中、教育行政でも力量や先見性が試されている。

いまや大学への進学率が50%を超え、理系学部の場合には大学院を修了していないと企業の採用基準を満たさないことが多い世の中となった。従って、博士課程まで進む学生の数も増大し、その結果、博士号取得者の数も昔と比べて多くなった。

理系の修士課程を修了した最近の学生と、以前の学部を卒業した学生の質（実力）を比較してみると、私にはどちらが優秀であるかの判断はできない。というよりも、かつての学部卒業生のほうが活力があったのではないかと感じている。そう感じる理由はどこにあるのか？

私が感じているのは最近の修士修了者の「踏み込む力の弱さ」である。自らが研究すべき範囲、研究すべき方法に自らが垣根を作りそこから出ようとしていないケースが多いと感じる。研究者には本来そのような垣根はないはずである。この垣根を勇気をもって超えていかなければ、新たな世界は広がってこない。これが出来なければ「足の裏のご飯つぶ」である。

以下は昨日のブログの再録である。「博士号」それ自体も一つのツールではあるかもしれないが、科学者として業を成すにはそれ以外の要素も求められる、ということである。

竹内薫著「ブレイクスルーの科学者たち（2010年）」という本がある。竹内のインタビューした11人の科学者が、ブレイクスルーのために必要と思っているポイントを書きより引用した。

- 1 山中伸弥 異分野を繋ぐ力+人を引き寄せる力+チームをまとめる力
- 2 傳田光洋 前例にとらわれない力
- 3 中垣俊之 異分野をつなげる力
- 4 新津洋司郎 他人のために尽くす力
- 5 坪田一男 人を引き寄せる力
- 6 山根公高 シンプルさを追求する力+境界人がもつ力
- 7 大内一之 境界人が持つ力
- 8 羽澄昌史 あえて「難解」なことに挑戦する力
- 9 小澤 明 仕事を楽しむ力
- 10 奥ノ谷一夫 チームをまとめる力
- 11 田中宏幸 異分野をつなぐ力

余談にはなるが、私が資格を取得したときには、

博士号

教授より スタートラインについた。これからも努力・研鑽を続けるように。

中小企業診断士

資格は取ったといっても「足の裏のご飯つぶ」。これだけでは食ってはいけない。

技術士

多くの仲間ができた。このつながりを利用し、仕事に活かすように。

それぞれに重みのあるお言葉である。「ブレイクスルーの科学者たち」にもあるように、博士号という呼称以上に重要なものが多く存在する。博士を取る過程で、科学研究を進めるための方法論を学ぶわけであるが、その方法論の上にとあらゆるアクセサリーを付して色どりを付け、大きな成果に導くことが求められている。もし、何かを成し得た時、博士号の存在そのものはもはや小さな存在となっているに違いない。博士号の取得はあくまでもスタートライン（第一歩）にしか過ぎないのである。